

日本史 B

飛躍の舞台は整った。さあ！ その手で「夢」をつかめ！

I. 全体講評

はやいもので、2017年度センター試験本番レベル模試も今回で最後を迎えた。本番を直前に迎えた今だからこそ、腰を据えて教科書の最初から最終ページまで点検する作業を繰り返していこう。

最終12月センター試験本番レベル模試の平均点は59.5点とセンター試験本試・日本史Bの例年の平均点に接近した数字であった。いよいよ本番に標準を合わせてきたといっていいただろう。大問別で見ると第2問・第3問の得点率はそれぞれ63.7%、66.7%と古代・中世史に対する「強さ」を感じることができた。これまでの課題であった昭和・平成史を中心とした第6問も58.3%と成長しつつあることが感じられる得点だった。

いうまでもなくセンター試験本試・日本史Bでは全時代・全テーマがバランス良く出題される。網

羅性を重視し、苦手範囲を撲滅すべく最後の最後まで努力を継続していこう。

II. 大問別分析

第1問 財政史・税制史に関する会話

出題が予想されるグラフ・図を使用した問題は過去問の類似問題を分析しておこう！

財政史・税制史をテーマとする会話文形式とした。2018年度から消費税が10%となることは周知の通りであり、時事的にも重要なテーマである。常に社会に関心の目をむけて学習にあたろう。

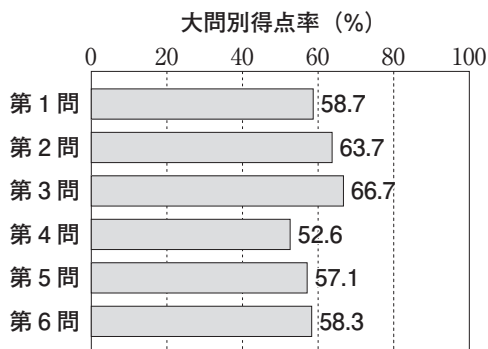
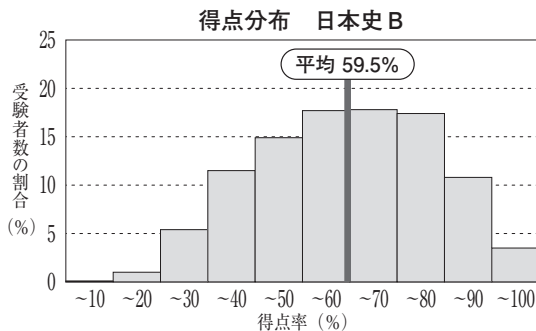
第1問の得点率は58.7%と6割目前の結果に終わった。問2のグラフや問3の図を用いた問題はセンター本試・日本史Bでは頻出であるが、それぞれ46.5%、41.0%の正答率には物足りなさを感じる結果であった。もちろん本番でもこの種の問題の出題は予想されるだけに、過去問の類似問題を点検することが何よりも大切だ。

第2問 原始・古代の研究動向

教科書の史実は最新の研究成果から書き換えられる可能性があることを知っておこう！

原始・古代の研究動向を紹介しつつ、複数の時期・分野を対象とする総合問題を出題した。史実は常に研究動向により変更される可能性があることを知り、合格後も日本史への熱い気持ちを維持してほしい。

第2問の得点率63.7%は本番レベルの水準に到達していたといえるだろう。問1・問4がそれぞれ83.1%、84.5%と8割を越え、好調であった。見直して欲しいのは問2で、誤答②を選択した受験者が21.7%にもものぼった。「多賀城」の所在地が混同しているようである。地図でしっかり確認しておこう。



第3問 中世の守護

最後の最後まで「繰り返し」学習にあたることで得点力を堅持していこう！

中世の守護をテーマとして政治史を中心に外交史・文化史と幅広く問うた。守護職権が拡大した背景や政権に与えた影響など総合的に理解しよう。

第3問の得点率は66.7%と、大問6題中最も高い数値であった。5割の正答率を下回る設問が皆無であったことが大いに評価できるだろう。この得点力を堅持したい。一方で問2はやや振るわず、54.0%の正答率に終わった。平治の乱や保元の乱に参加した皇族・公家・武士らの相関関係については往々にして理解が浅い。図版集などで相関関係をいま一度点検しておこう。

第4問 江戸時代の武士

美德とされた「武士道」を深く考えることで、日本人のルーツを感じ取ろう！

武家社会のもつ「武士道」精神を題材に江戸時代全体を俯瞰する問題とした。かつての日本人が美德とした武士道について深く考えることで、日本人のルーツを感じ取ろう。

第4問の得点率は52.6%と大問6題中、最低の数字に沈んだ。好不調の波が大きく、問6は71.7%と7割を確保した一方、問3は23.7%と落ち込んだ。後者は史料の読解問題であったが、史料に記されている内容ではなく、参勤交代に関する固定概念に縛られた結果といえよう。「註」をヒントに史料内容を正しく読み取ることが大切だ。

第5問 幕末・明治期の天皇観

各内閣が遂行した政策は、時代背景と整合させて考えることで理解を深めていこう！

幕末・明治期の天皇観について取り上げた。2019年4月の天皇陛下の退位が正式に決定されただけに「天皇」に関する歴史を深く理解する機会としたい。

第5問の得点率は57.1%と、やや決定打に欠いた印象だ。問1の空欄補充問題は77.3%と8割に迫る結果であったが、問4は45.2%と5割を下回った。誤答②・③を選択した受験者がともに2割にのぼった。時代背景と整合させることで、その政策遂行の必然性について感じ取ってほしい。

第6問 谷崎潤一郎と近現代の日本

人物史と特定テーマ、どちらの形式で出題されても柔軟性をもって対応しよう！

耽美派の小説家である谷崎潤一郎を取り上げた。第6問では人物、または特定のテーマが問題文とされるケースが多いが、どちらが出題されてもよいように対策を講じておこう。

第6問の得点率は58.3%と第1問や第5問などと同水準であった。文化史や近代経済史といった得点が伸びにくい設問が多かっただけに、「踏んばれた」結果といえよう。近代経済史をテーマとした問5は32.7%と伸び悩んだ。本番までの時間でこのテーマを得点源とできるように点検を繰り返そう。

Ⅲ. 学習アドバイス**◆新テストへの布石と意識しよう**

先日、2020年度から開始される大学入学共通テスト（新テスト）の試行調査結果が発表された。これまで以上に図（地図）やグラフ・表から、史実を多面的に考察する力が求められていることは一目瞭然であった。2018年度センター試験本試・日本史Bもその大学入学共通テストへの布石と考えて臨んだほうがよいだろう。つまり、視覚教材をともなう問題が多くなることは容易に予想できるだろう。その形式をとっている過去問を解きこむことにより慣れておくことが何よりも大切だ。

◆大局的に生きる

戦後70年を過ぎた今、日本社会では当初予測できなかった問題が山積している。問題解決のカギは君たちの能力にかかっているといっても過言ではない。世界の人々を幸せにするといった壮大な大局的な視野をもてる人材として、飛躍することを切に願っている。朗報を待つ。

一天を敬い、人を愛する（敬天愛人）－

西郷隆盛